

第15回京都山城便教会

平成 30 年 5 月 13 日 (日)

第 15 回京都山城便教会は、向日市立西ノ岡中学校で実施しました。参加者は 5 名。最初に自己紹介を行い、今回のテーマを以下のようにお伝えしました。

今回のテーマは「なぜ掃除をするのか」です。謙虚になるために、掃除をするのでしょうか。何かを得るために掃除をするのでしょうか。違うと思います。では何のためにするのでしょうか。それを考えながら、そして自分と向き合いながら掃除をしましょう。

今回の参加者は、経験者ばかりでしたので、多くを説明せず、とにかく感じていただける時間を多く取っていただこうと思い、便器を 1 人 2 個担当することだけ確認してすぐにトイレ掃除に入りました。

今回のトイレもなかなかの強者。頑固な水あかと尿石がしっかりとこびりついていましたが、今回の参加者はさすが経験者。汚れにうろたえるどころか喜びさえ感じ、サンドメッシュの音を奏でておられました。無言で「シュッ、シュッ」という音だけが流れる空間には良い気が流れ出し、凜とした空気を創り出していました。



「もうそろそろ、次の便器へ」と 1 個目から 2 個目に移るように声かけたときには、参加者の皆さんから名残惜しそうな目で「もうちょっとやらせて」という無言のメッセージがありましたが、次の便器も「早く磨いて」と待っていたので、心を鬼にして、次の便器へ移っていただきました。次の便器は、当然ながら手つかずの状態なので、参加者はここでもう一度気持ちを引き締め、2 個目の便器に取り掛かりました。

< Before >



< After >



便器のあとは、洗面所、壁、そして床へと移りました。この辺りもさすが経験者。言葉を多く交わさなくても、役割分担がさっとなされていました。必要だと思うところに、さっと動く。どんな役割でも引き受ける参加者の器の大きさを感じました。



そうして終えた掃除の後には、トイレが嬉しそうに輝いていました。松下幸之助翁が「人間はダイヤモンドの原石」と言われていましたが、トイレが磨けば輝くように、生徒も磨けば必ず輝くと改めて感じました。

トイレ掃除終了後の交流会では、以下のような感想が聞けました。

- トイレ掃除と教育が同じに思えました。汚れによって、上から磨いたり、ななめから磨いたりとやり方を変え、工夫する。生徒に対しても、同じ方法ではなく、その子に応じた方法で接することが大事。
- 1つ目の便器は、昨年のクラス。どこかで名残惜しく感じている。そして2個目が、今年のクラス。どうしても1個目を引きずりそうになるが、2個目も同じように磨けば同じように輝くはず。
- 掃除に私利私欲は必要ない。私利私欲があると磨き方にムラが出るが、無心でやっているときは、全体がきれいになる。
- 人間はいつから掃除をやるようになったのか。それを考えているうちに「生と死の違い」ではないかと感じた。きれいになると、生命が躍動するように感じる。しかし、死んだものは汚れて腐っていき、無になる。汚いままにしているは死んだ状態。掃除は、命を吹き込むことではないだろうか。
- 掃除をしていて「良いことをしている」と思っているうちは日常ではない。当たり前になるようにしたい。
- 人は一人では生きていけない。どこかで助けてもらっている。今の生活の中で、自分の知らないところで、自分の今の生活を支えてくれている。だからこそ、自分も目に見えないところで、誰かに思いを馳せ、できることをやる。それが掃除ではないだろうか。そしてどれだけの範囲に対して、思いを馳せられるかでその人の器が決まるのではないだろうか。

このような感想を述べあい、第15回京都山城便教会を終えました。参加者の皆さんの笑顔が最幸です。

次回は8月。どんどん、輪を広げていきたいと思えます。

(小笹大道)

